

青年期における養護性獲得の課題(第2報)——自己の子ども期の
体験と『子ども』についての理解の関連——
岡野雅子(群馬女子短大)

【目的】 誰でも子ども時代を経て大人になることから、自分の子ども期を振り返ることができる。前報の結果は、子どもに対する感情は自己の子ども期を回想した後に若干好転することが認められた。しかし、①子ども期の嬉しかったエピソードは「家族旅行」「買ってくれた」などを挙げ、②子どもが嬉しいと感じる状況は、誉められ認められること、との回答が多く、①のエピソードと②の認知的側面の回答は直接的に結びつかなかった。そこで今回は、子ども期の体験が『子ども』理解の深まりにどのように作用するかに焦点を当てて検討した。

【方法】 2年制大学3校の女子学生162名を対象に、質問紙調査を行い、自己の子ども期に嬉しいと感じたエピソードとその時なぜ嬉しいと感じたのか(自己分析)、および「子ども」についての認識などについて回答を求めた。資料収集時期は1999年12月である。

【結果と考察】 (1)自己の嬉しいエピソード場面は、家族で旅行や外出・家族一緒・幼稚園保育所の遊びなどが多く、嬉しいと感じた理由は、褒められた・家族一緒で安心だった・要求が通った・友達や先生と一緒に楽しかった、と分析する。(2)「子ども」が嬉しい状況は、褒められる・受けとめてくれる・愛情をかけてくれる・家族が一緒で安心などが多く、子どもと良い関係を形成する関わり方は、善悪のけじめをしつける・子どもの目線で考える・話をよく聞く・共感する、などが多い。(3)したがって、自己の体験の回想は具体的状況の記述に流れがちであるが、「子ども」が嬉しい状況は人との関わりを述べていることから、「家族旅行」「家族一緒」「幼稚園の遊び」等の表現を用い十分な自己分析ではないものの、それは些細な具体的場面に留まらず、子どもの安心感・安堵感に対する彼女たちの気づきを表しているものと思われる。